

書の一巻野になげて
いそぎ朝衣の袖からく

曙 光

立花 白月

波より立つか天つ雲
雲より湧くか沖つ波
松が枝ごしに寄せ返す
浪よろこびを歌ふかな

七つの星のきらめきは
みごりの玻璃に白銀の
小さき彫刻示すごと
暁のみ空にたゆたへり

妙にくづるゝ日の柱
雲を五彩にいろざりて

一日快樂の空に翹らむ (完)

空もわかやぐ明方や
神秘の影の仰がれて

深き心の底よりぞ
神のみ前に嚴かの
祈りさゝぐる時のごと

清き思ひのわき出づる

淺黄色濃き海原を

飛白のあやに織りなして
見る目すゞしき風の羽に
鷗うかぶか帆の光

ふく朝風にきら／＼と

梢に清き雫あり

白波よする砂の上に

ふめば聲あり貝の殻

沖遙かなる横雲の

彩の扉のひらかれて

俳 躰 詩

暖

半胴の水に朝日さして

きら／＼天井に映る

目荒き障子

額あたたかき程の明さ

白馬曰。冷たい土間につくねんとして雞一羽。米もなし。

越 吳 坊

白馬（評点）

朝日の影のわくところ

世は『よろこび』の色にみつ

疑ひ悶ね悲哀の

胸の惱みの消へぬ子よ

つきぬ自然の領に入り

高きあしたの『聖』巨きかずや（了）

硯の蓋に埃見へて

臍に鳥籠いびつ

度合はぬ幻燈のごと

宙返する山雀可笑し

白馬曰、破垣から顔を出した猫、惜むらくはれむさう也。

餌猪口の縁怪げにつかみ

糞落ちてぬるみし水

嘴につけて仰向く。舌動く